日　本　語

火祭り博物館

MUSEU FALLER

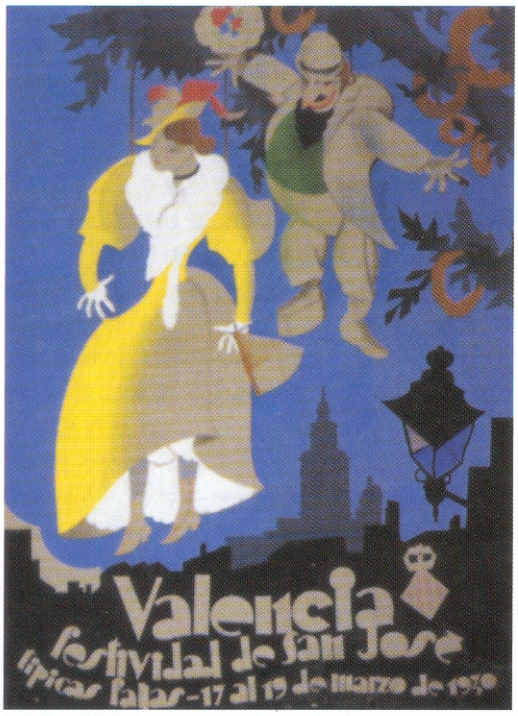
バレンシア市役所

ファージャ、ニノットとは？

読者が初めてバレンシアを訪れて、いったいファージャとは何か、ラザリスト会の旧修道院の建物に設置された、この博物館が何を意味するのかを理解するのは、少し難しいかもしれません。
ファージャ (las fallas) というのは、独特の風刺のきいた作り物で、可燃性の材料（ボール紙、木材その他）を使って、広場や主な通りの十字路に作り上げられ、数日間、公衆に披露されたあと、バレンシアの守護聖人サンホセの祝日、3月19日の夜に燃やされます。
作り物の製作は、作り物師の担当で、祭りを準備するために一年間働く、委員会にまとめられた、それぞれの地区の住民の努力も加わえることができます。
それぞれの作り物師は、通りへの設置の数週間前に、製作されている作り物の中でもっとも良くできていると思われる像を選びます。そして、選ばれたニノット(ninot)と呼ばれる大人形は、合同展示会に展示されます。そして一般投票により、見た目に美しく、面白く、風刺のきいている大人形に賞が与えられます。つまり大衆の声によって、火からの恩赦に値する、燃やされることから免れる作り物が決められるのです。毎年賞を与えられた大人形（大きな作り物から一つと、子供の作り物の一つ）がこの博物館に仲間入りします。優れた作り物の写真と、毎年のコンクールで優勝した祭りを告げるポスターとともに、ファージャは、博物館の所有物となり、一般的な文化財、バレンシアの火祭り (las Fallas de Valencia) という大きな祭りの財産となっています。

博物館の30年代から50年代までを扱った展示室

火祭りの歴史



「ペレレス」1930年 アントニオ ベルチェールのポスター

18世紀の中頃、火祭りはサンホセの祭り（3月19日）の典型的な行事プログラムに含まれている、祝賀行事の一つにすぎませんでした。18日の夜明けに、街の大通りのいくつかで、通りの真中の窓から窓に吊るされた胴上げ遊びに使われる人形が、あるいは壁に付けられた小さな板張りの壇が見うけられていました。それらの壇の上には、ある出来事、振る舞い、非難されるべき人物をほのめかす、一つか二つの人形（ニノット）が置かれていたのです。

その日、子供や若者は、可燃性の材料を集め、ファージャという名前をつけられた、古いがらくたの山を準備したものでした。それらは、サンホセの前日、日が暮れる頃、大勢の人を集めて、焚き火の周りで燃やされました。翌日は半日祝日で、大工や、信心深いバレンシア人は、守護聖人を祝うために教区教会に出かけました。多くの家庭では、洗礼名が同じ聖人の祝日を祝い、そこではペペたち（ホセの愛称）を、パイ、揚げ菓子、アニスなどでもてなしていました。

ファージャについて述べている最初の資料は、バレンシア市の王室代理官へ向けた一つの通達で、狭い通りや家の境界での人形（特に舞台タイプの作り物）を置くことを禁止するためのものです。警察のこういった対策（火事の予防）の結果、住民は広い通りや広場に作り物を置かざるをえなくなりました。奇妙なことに、このような単純な対策が、意図することなしに、時間とともに、重要な変化をもたらしたのです。作り物は水平で二部から成る舞台構造（舞台とその上の場面）をもっているにもかかわらず、通りや広場の真中に置くとき、回転する以上、それらを独立して見なければなりませんでした。作り物全体を見るためには、回転させねばならず、また壁から離すときに、構造的な新しい可能性や周りにメッセージを書く必要が生まれたのです。

たいまつ、焚き火、胴上げ遊びの人形、板張りの壇、長い時間の間に、それらはファージャという名前をもらいました。しかしながら、この名前の使用は、風刺の山について、つまり人々にその当時の悪習や偏見を見せる舞台上の風刺について、序々に制限されていったのです。毎年期待をかき立て、住民が多数見に行く作り物は、そういったファージャだったのです。それらは、多面体の構造、一般的に四角形で、木製の骨組をもち、装飾的に彩色されたフレーム、土台の可燃性材を覆い隠す布やパネルで覆われていました。また舞台に登場する人形あるいは像は、古い布か古い服を身に着けていました。これらの風刺のきいた作り物は、"*els Miracles de sant Vicent*"と同様に、常に数枚の詩が添えられていました。それらは、もっとも近い壁、あるいは台座フレームに吊るされた風刺文で、それは作り物で脚色されるテーマの韻文形式の注釈に発達していきました。１９世紀の中頃、このような詩を印刷するとき、小さな折り本に編集するとき、オリジナルを*llibrtet*（作り物を説明する台本で、通りに置かれた）に残したので、その結果、プロットを広げる可能性が、かなり広がったのです。
風刺作り物の特色は、非難されるべき社会的出来事を表すところにあります。ある具体的なテーマがあり、批判の意図、あるいは少なくと

火祭りのために古いがらくたを集める子供たち

もからかいの意図をもっています。普通の焚き火や、古いがらくたの山と違うのは、作り物師が正すべき、あるいはからかうのに値すると考えた人物、出来事、集団行動をほのめかすものを舞台に表現する点です。
19世紀中頃、作り物師が好んで扱っていたテーマは、エロティックな作り物と社会的批判の作り物でした。
1858年、テアトロ広場の作り物師たちは、社会的不平等に直接言及した（人間を使った像を用いた）動く作り物を作りあげようとしました。そしてその詩は、ホセ マリア ボニーリャのものでした。しかしその作

1860年、“予言、占星術、月の満ち欠けの挿絵入りバレンシア王国暦”の中で、公表されたグラフィックに現れた最初の火祭り。当時非常に使用されたミニニャーケモードを暗示し、批判したもの

り物は当局によって禁止されたにもかかわらず、作り物師たちは、翌年も同じテーマを繰り返しました。一方、当時のマスコミは、あるタイプの作り物に、エロティックな作り物、あるいは反夫婦傾向の作り物という名前をつけました。それらは、非常に数が多く、誤りで満ちた言葉で、辛いあるいはきわどい暗示が多くあり、快楽主義的で下品な考えた方を反映していました。ベルナットとバルドビは、このテーマを扱ったいくつかの*llibrets*を書きました。しかしながら、多分もっとも知られているものは、1866年トリニダッドデシャーティバ広場の作り物のために、ブライ ベルベールによって書かれたものです。それは、結婚生活の苦労と名づけられ、大司教は、それを明確に非難しました。

19世紀の間、一般的に市役所、並びに当局機関は、作り物に対して警戒、非難の態度を取り続けていました。都市の習慣を近代化し、改善する必要から正当化された、この抑圧的政策は、人気のある祭り（カーニバル、火祭り、その他）を根絶しようとし、70年代には、作り物を置く許可と音楽を奏でる許可に関する厄介な税を設けて、それを強化しました。その反動として、この抑圧は、典型的伝統を守る動きを生み出し、1887年、雑誌“*La Traca*”は、初めて優れた作り物に賞を与えたのです。イニシアチブは、1885年のルネサンスのLo Rat Penat協会によると言えるでしょう。賞を通しての、この明確な市民の支援は、

住民委員会間の競争心を目覚めさせ、熱心な作り物師を刺激し、耽美主義傾向が生まれて、芸術的作り物が作られるようになりました。そこでも、（政治的なものの定着の試みも含めて）批判というものは消えることはなかったのですが、作り物への造詣よりも、むしろ形式的、構造的、美的な関心が優位を占めるようになってきました。1901年、バレンシア市役所は、ためらい、遠慮勝ちではあったものの、 Lo Rat Penatを引き継いで、作り物に、最初の自治体賞を与えたのです。それは祭りが終わった後のことで、一つは100ペセタ、もう一つは50ペセタの二つの賞でした。この自治体の参加は、住民にとって、好ましいだけでなく、望んだものでもありました。バレンシア地方主義や、スポーツ、政治、労働者の協会と同様、文化や娯楽の協会も含めて、幅広い組織はすべて、この世紀の初めの10年間、火祭りを発展させるのに力を注いできました。この社会的な支援に呼応して、火祭りは、しだいにバレンシア地方主義高揚に傾斜を強め、作り物の祭りとバレンシア州は、しだいに大きな融合を生み出していきました。

エスカランテ（カバニャル）通りの作り物の組み立て、1934年アーティスト：モデスト ゴンサレス

作り物: **El día de l'Estatut**

20紀の初めから、作り物は、二重構造（舞台と場面）をやめ、新しい構造コンセプトを発展させていきます。その中で人形は、すでにもっとも衝撃的なものではなくなっていました。当時作り物は、様々な要素、レベルの重なりから成っており、その基本的なものは以下の三つでした。数々のシーンのための、レピエスと呼ばれる小さなベースから成るわずかな高さの土台、作り物や装飾を支える中央部分。そこには、下の場面を広げ説明している、テーマを凝縮させることができる寓意的なモチーフから成る大きな像がありました。
作り物の内容は、すでに舞台が表していた場面のみに記入されたものはなく、作り物全体にそれが潜在しており、作り物の周りを回って、上から下へ一目見て判読できるものでなければなりませんでした。その当時の作り物は、華麗で、堂々としており、魅力的な、遠くからでも判るものでなければならなかったのです。
賞の圧力の下、作り物は、記念碑性、釣り合い、バロック主義を理想的な模範として採用しました。
1927年、魅力的なバレンシアという観光促進のための協会は、最初の作り物列車を準備しました。これは、バレンシア住民がさらに作り物に懸命になるほどの成功を収め、製作された作り物の数も、明らかに増えていったのです。祭りの成長は、またより良い組織化を図らずにはいませんでした。こうして、バレンシア火祭り協会と、委員会を代

表し、祭りを主催する火祭り中央委員会が生まれたのです。
1929年、市役所は、火祭りを促進するためにポスターコンクールを始め、1932年には、行事プログラムすべての主催者となり、“火祭り週間”が作られました。作り物の多くは、専門職人・アーティストの作品で、彼らは数カ月間、仕事場で製作に励み、また作り物師協会を組織しました。
1935年に発行された、V. Lipis Piquerの署名で、どのように作り物を準備するのかというタイトルの記事は、私たちにどのように作り物が製作されていたかを詳細に教えてくれます。

その中でもっとも重要な要素は以下のものです：ボール紙、石膏、蝋（ろう）、そして忘れてはならないフレーム用の木材、大きな塊のための麻布で覆われた金属メッシュ。
このような単純な材料を使って、バレンシアのアーティストたちは、壮大な作り物の建造によって、その価値を明らかにしながら、大きくて永遠の作り物の製作を競っています。
もっとも難しく、おもしろい工程は、頭部の型の製造です。アーティストが、女性か男性の形を与えて土から作り出した型は、蝋製の一連の頭部をつくために石膏に入れられます。蝋製の頭部には仕上げとして、口ひげを加えたり、一つの目をそらしたり、人間離れするように、口に引きつった笑いを加えたりして、作り物全体の中に様々な人物を作り出していきます。
もっとも簡単なのは、体の製作で、石膏の型にカーボン紙を当て、湿気のある圧力をかけて、見事なラインを作っていきます。この仕事は、本物の作り物師の見習いの仕事です。
作り物師たちは、再び土を使って型をつくり、いくつかの身体的なバージョンをもつ、人間の形が次々に生まれ、付属品を加えて、次第に完成されていきます。こうして次々に作り物の様々な登場人物が生まれていくのです。一つの型から、いくつかが、例えば手について、それぞれが違う表情をもっていても、同じ見かけのものが複数生み出されます。困難な、非常に難しいのは、この蝋に彩色することです。わずかな者だけが、それぞれの作り物が要求する、生きているような見かけを、色でうまく表すことができるのです。それは、研究と根気の賜物であり、奇跡が起こるのです。
この工程の後に何が必要でしょうか？　その後、魂を中に入れながら、体を組み立てていきます。このときには、藁や布、おがくず、蝋という非常に弱い材料を強く固定するために、木材を使います。こうしてできた人物たちは、通りに設置する日に、壁とともに配置され、その間フレームやモジュールが人形に釘うちされます。夜の暗闇の中では、それは本当の人間と見間違うほどで、見る人は、もう本物と作り物を区別することができなくなってしまうのです。

恩赦を受けるニノット（火から免れる人形）

1934年最初のニノット展示会のシーン

20年代、芸術的な作り物が、まさに作り物の手本としてすでに導入されていたとき、創造作品の完全破壊を惜しむ声、すばらしくよくできているある像、あるいは全体の中で傑出した場面を、火から放免しようという声が、聞かれ始めました。1924年、すでに正式のものとして、好ましいものとして受け入れられたわけではなかったものの、一つの恩赦のニノット（人形）が提起され、1933年、火祭りの歴史を語るパレードが催された際、そこから一般投票によって、一つの人形に賞が与えられました。

1934年、市役所は、火祭り週間に新しい祭り行事を導入するため、アイディアコンクールを行いました。こうして、作り物師で、作り物師協会のメンバー、レヒーノ マス が、火からの放免というタイトルの下、一般投票でもっとも票を得た恩赦のニノット（人形）ともに、火祭りの人形の最初の展示会開催という提案を実行し、1936年には、ニノットのパレードが始まったのです。

1934年の恩赦を受けたニノット（人形）
作者：ビセンテ ベネディート、メルカット広場

蝋（ろう）

蝋でできた頭部の彩色

18世紀後半、あるいは19世紀初めには、ニノット製作の技術や使用する材料についての情報は、ほとんどありません。その当時現れた最初の人形の体は、木の中心部分あるいは、トウ（麻や亜麻などのくず繊維）で覆った針金で作られ、古い布あるいは服が着せられていました。足には、使われなくなった靴、四肢にはアフリカハネガヤ（イネ科植物）を詰めた手袋が使われていました。

蝋工程の導入が始まった前世紀の60年代まで、顔はボール紙の仮面が使われていました。

蝋を造形する工程は次のようになっていました：まず、一般的に土を使って、風刺する人物の上半身を作り、その形から二つ、あるいはそれ以上に分けた石膏の（必要な上半身が）空になった型を得ます。これらの型に、より固くするために薄い層のガーゼ（薄地モスリン）を使って強くした、とろとろの蝋を注ぎます。頭部ができたら、最後に、輪郭に薄い膜を張らせて強度を得るために、その中にアラバスター液を注入します。これが終われば、マスクはもう彩色できる状態です。あとは、伝統的なスタイルを受け継いで、像が完成されていきました。

1943年の蝋製頭部の展示会

ボール紙

まだ型を使っているボール紙の複製

30年代に、巨大で芸術的な作り物が強化されるのに伴って、標準的なニノット（人形）を製造するために、*tirar de cartó*(型に紙ペーストを入れ像の大量生産をする）として知られる技術の導入が始まりました。このことは、1934/35年の発行物に現れた数々のニュースやレポートから、そして1937年の作り物を特集したノバ クルトゥーラ誌の詳細号で確認できます。おもちゃの人形製作に使われている技術を踏まえながら、作り物師たちは、頭部や上肢を付けた後、まるでマネキン人形を扱うように、ニノットの体を組み立て、ふさわしい衣装を着せて、個性を与えていたのです。

1953年、ボール紙での人形の完璧な造形、すぐ後にボール紙での作り物全ての完璧な造形を導入したのは、作り物師フアン ウエルタでした。

ボール紙の技術は以下の順に行われます：

まず、土で形を作った後、ネガを石膏に取り、それを二つに分けます。ボール紙を千切って濡らし、柔軟性をもたせるためにもっと細かくします。それを糊に浸した後、連続した層を作りながら、入り組んだ型に置いていきます。そして、このボール紙が乾燥したときに取り出すと、他の部分と組合せ、完成を待つ（骨格をつくる）準備ができたことになります。

最初の完全にボール紙で作られた恩赦をうけたニノット（人形）
アーティストフアン ウエルタ1956年 作り物
J. アントニオD. デカラブリア

それが終わると、もう一度薄くした糊で、外側表面を塗り、隙間やでこぼこを無くすために、新聞の小さな切れ端を貼っていきます。そして目指す表情や見かけを得るために、*pasteta*で変形させて、色塗りの準備をします。この作業には、*donar de panet*という名前が付けられています。ボール紙の表面は、連続した接着剤と糊の四つの層で覆われ、その後、ごつごつした部分や塊を取るために、やすりで磨き（エスカタットと呼ばれる）、最後に色調をあわせて、プラスチック塗料か油絵の具で彩色されます。

ポリエステル

ポリエステルでできる様々な可能性の一つの例。トゥリア川の川床に、マノロ マルティンが作った（グジベール）の像

70年代、それまで伝統的な工程で未知であった、ポリエステルという新しい材料が使い始められました。価格は、割高ではあるものの、丈夫で非常に軽いために、伝統的に、作り物の製作だけでなく、山車の製作や、飾り付けをしていた作り物師の仕事にとって、この材料は理想的なものでした。その数年間、多くの人形や装飾はこの材料で作られていました。

技術は、特別な促進剤として、ボール紙を一、二層ポリエステルに変え、同時に布の代りにガラス繊維で強化するものです。ポリエステルは、反応すると固くなり、乾燥に何日もかかるボール紙と違って、すぐさま乾燥します。
いくつかに分けた像のそれぞれの部品が乾燥したら、針金で組み合わされ、固定されます。その後、継ぎ目にガラス繊維を使いながら、もう一度ポリエステルを塗ります。最後にやすりをかけて滑らかにし、くぼみをパテで補正すると、色を塗る準備の出来上がりです。その後は、伝統的な過程を続けます。

1977年、ポリエステルとガラス繊維で作られた最初の恩赦を受けたニノット
アーティスト-マルティーネス　モヤ　作り物：ビラール広場

ポリスチレン

作り物芸術は、正しく分類すると、つましい芸術と言えます。常に、つかの間の、消耗性の材料を使うだけでなく、地味で、安く、ありふれた材料を使ってきたからです。ここ数年、私たちは新しい材料の導入を始めました。それは、白いコルク、発泡スチロールで、それによって直接造形と呼ばれるものが簡単にできるようになりました。つまり、型を使わずに製造ができるので、大量に複製を作ったり、標準複製を作る必要がなくなったのです。

1995年、全部を発泡スチロールで作成したグループ
アーティスト：ミゲル サンタエウラリア
作り物：Na Jordana

1984年、ニノット展示会に、全面的に発泡スチロールで作られたグループ（*El fantasma de la renta*）を最初に出品したのは、ミゲル サンタエウラリアでしょう。この白色の寄せ集めは、異なった厚みの薄板に陳列され、非常に変化に富んだ構成を可能にし、軽いので、取扱いも極めて簡単です。回転台とアーク（おしまいが抵抗の簡単な電気器具）を使って、カットし、像を作り出します。得られるピースには、3種類あります：もし構成が適切であれば、直接彩色されます。しかし、この素材は多孔質で、粒状なので、しばしばパテの後、それを覆うためにボール紙で包み、彩色の前に研磨する必要があります。最後に塗布ピストルを使って彩色し、ボール紙に採用した基準によって仕上げることも可能です。

発泡スチロールあるいは白コルクで、ニノットを作っている、アーティスト ラモン エスピノーサ

子供の作り物

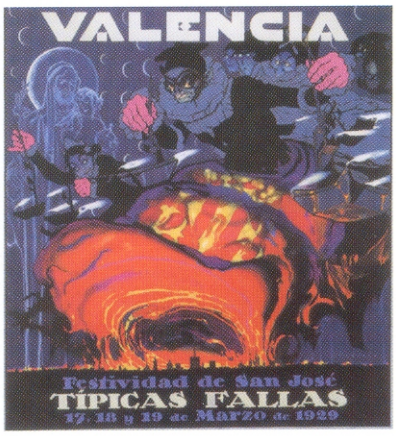
1933年の子供作り物。当時これらは、子供たちだけで作成された。

作り物が始まって以来、子供や若者は、可燃性の材料を集めたり、作り物の火葬の際に活気を与えたり、祭り行事の中心的な役割を担っています。しかしながら、芸術的な作り物が強化されたとき、その製作は専門家の手にゆだねられ、子供や若者たちは、一時的に祭りから疎外されてしまいました。しかしながら、20年代の後半、しばしば子供たちの作り物が現れ始め、その少し後、雑誌*El mercantil Valenciano*は、*Los Chicos*という名前の一冊の祭り週刊誌を発行し、子供たちが作った素晴らしい作り物に対する賞を設けるという、この革新的な試みを実践しました。

1936年には、すでに80の子供の作り物があり、子供の火祭りの女王が任命され、また子供の作り物の人形の展示会も開かれるようになりました。多少の増減はあったものの、60年代まで、この数はほぼ続き、子供の作り物の数が明らかに増大したのは、60年の後半のことでした。1963年、もっとも良くできた人形が、火から免れるよう、初めて子供の人形がニノット（人形）展示会（1934年から開催されている）に含まれるようになりました。

1991年、恩赦をうけたニノット
作者：フアン カネット 作り物：Na Jordana

火祭りポスター



1929年、 作者：ホセ セグレージェス

1929年、火祭りの絶頂の時期、バレンシア観光促進協会は、初めての火祭りポスターを、国際的に有名な芸術家、イラストレーターであり、ポスターアーティストのホセ セグレージェス アルベルト(José Segrelles Albert) に依頼し、彼はバレンシア市に寄贈した、すばらしい独創的な作品を仕上げました。同年、“作り物師”というタイトルのホセ セラノ作曲によるパソドーブレ（軽快な舞踊曲）が初演され、最初の祭り行事の公式プログラムが発行されました。

翌年1930年、コンクールが開かれ、応用芸術学校教師のビセンテ カネットが優勝しました。

それ以来、芸術の様々なジャンルで名を知られた数多くのアーティストが、それぞれの作品によって、このコンクールの賞リストの権威を高めてきました。

1932年、ラファエル ラガ モンテシーノスの、リズムのあるシンプルながら宣伝効果をもった *“el farol”* というポスターが作られました。

1934年には、ホセ レナウが優勝しましたが、その作品は、印刷されたものではなく、オリジナルは市民戦争中に消失してしまいました。

火祭りポスターのテーマは非常に幅が広いのですが、1956年のサンティアゴ カリレロの作品に見られるように、当然のことながら火が多く、他にニノット、作り物、花火の打ち上げ、バレンシアのシンボルなどがあります。芸術様式も様々で、モダニズムからアールデコ、キュービズム、ポップ、抽象が作品の中に反映されています。

“クレマ（人形を焼くこと）”によって生み出される、明るさ、光明度は、1944年のチャピ 、1950年のビセンテ ヒル、1963年のアルベルト ペレスに、その例をみることができます。

1965年後は、非常にシンプルで宣伝効果のある伝統的バロック様式へと替り、その中で1965年のダミアン コントレーラス オルティス、エンリケ メストレ、1980年のミゲル トマス ペレス の作品が際立ちます。

1982年、祭りの全特異性を火の叫びに集約した、ラファエル コントレーラス フエサスの抽象により全面的な更新がもたらされます。

ビセンテ ロレンソ1988年の作品は、ポスター-イラストレーションのラインをたどっています。

最近の、才能ある若者の作品には、1994年の衝撃的なドメネク モレラ、1995年、いくつかの暖かい輪郭をもつMarisa Llongo、1998年の市を巡る火の魂を具体化したアギラール ガルシアの作品があります。

バレンシア市役所

発行：バレンシア市役所
連携： Museu Faller 火祭り博物館
文書： Antoni Ariño
文書：火祭りポスター: Rafael Contreras
デザイン：Museu Faller 火祭り博物館